

2025年問題に象徴されるように、  
日本は世界的に類のない超高齢医療社会に突入している。  
日本人の二人に一人ががんで亡くなる、という現状のなかで、  
平均寿命は女性86.83歳、男性80.50歳(2014年厚労省)となり、  
がん患者の高齢化とそれに伴う臨床的対応は喫緊の課題といえる。  
しかしながら、高齢がん患者の存在が当然となりつつある現状においては、  
臨床的対応をどこか一般化し、なんとかその場をやり過ごしてしまう現実も  
生み出しているのではないだろうか。そこで本特集では、  
わが国における「超高齢者のがん診療」として「80歳」というフレームを設定し、  
超高齢者ががん診療の特性とリアルに迫りたいと思う。

# Feature July 2016 Topic

## Over 80 歳のがん診療

### 総論的序説

佐々木康綱(昭和大学医学部内科学講座 腫瘍内科学部門)

### 社会学の知見から

伊藤嘉高(山形大学大学院 医学系研究科医療政策学講座)

相澤 出(医療法人社団爽秋会)

### 臨床試験のデザイン

長島文夫(杏林大学医学部 腫瘍内科学)

### 意思決定のプロセス

林 直美(公立陶生病院 外科)

安藤雄一(名古屋大学医学部附属病院 化学療法部)

### 認知機能障害と超高齢がん診療

明智龍男(名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学分野)

### 糖尿病と超高齢がん診療

山本剛史(昭和大学医学部内科学講座 糖尿病・代謝・内分泌内科学部門)

平野 勉(同上)

### ポリファーマシーと超高齢がん診療

藤田健一(昭和大学 腫瘍分子生物学研究所)

### COPDと超高齢がん診療

楠本壮二郎(昭和大学病院 腫瘍内科)